

訃報

朝日新聞（夕刊）

2008年（平成20年）8月22日金曜日

「現代美術」定着へ尽力

定着したと言うにはまだ早い「現代美術」を広め、根づかせようと土壌を耕した。だが、画廊界に転身したのは45歳。ドラマを秘めた一生だった。

京都府舞鶴市生まれ。旧制第四高等学校（現金沢大）から京都大経済学部に進み、農林中央金庫へ。勤めながら画廊巡りをし、評論を書いた。当時の、現代美術系画廊の雄の一つ南画廊の画廊主・志水楠男氏に「経済にも強いはず」と請われて73年に同画廊へ。

5年後に独立。画廊は当初、東京・京橋に構え、後に銀座へ。やがては東京・荻窪の自宅事務所に拠点を移したが、計197の企画展を開く。尊敬していた詩人・美術評論家の業績を顕彰する「オマージュ瀧口修造展」28回を核とし、梱包作品で知られた米国のクリストから、日本の若手までを扱い、育てた。その大半のカタログのあとがきを執筆しただけでなく、「私の画廊—現代美術とともに」「画廊のしごと」など7冊も出版。大学で「アート・マネジメント」の講義もした。

旧制高校では理系に属したが、同級生らは「文学少年で、下宿には文学書や美術書ばかり」と振り返る。祖父母の代に、わけあって、後に著名な詩人になった三好達治を養子に迎えたことがあるという。そんな環境で育った。

晩年は、税制の不備を指摘し、政治家の無教養や行政の無策を憂うことが多かった。が、06年募れ、がんが見つかる。様々な治療は試みたが、手術はせず、一進一退。その間にも展覧会を開き、別の企画の構想を語っていた。

8月1日、都内のホテルで開かれたお別れの会には、約400人が集まった。美術評論家・針生一郎さんは「佐谷さんは作家の別の側面を引き出す仕事をした」と評価。旧制高校の同窓生が寮歌で送った。晴朗な人柄で、信頼された画商のバックボーンを想像させる葬送だった。

田中三蔵